

- 【★10】 Савелл, *The World Viewed*, pp.167-168. (カヴェル『眼に映る世界 映画の存在論についての考察』、248-249頁。)  
【★11】 СТИ-96 «О технике съемки, о возможностях света, о движении» [「撮影技術について、照明の可能性について、動きについて」]。С.344。

## 結論

- 【★1】 СТИ-5 «Для меня новое ощущение времени произошло на «Шинели». Психологические подробности открыли, что в секунде больше, чем 24 кадра» (『外套』の制作で私には新しい時間の感覚が生まれてきた。心理を詳細に見ていくことで分かったのは、1秒には24コマ以上あるということだ)。С.27。  
【★2】 СТИ-18 «Тот самый фильм о любви, который мне так и не пришлось снять, или Слово-объектив» (「撮影することが叶わなかった愛についての映画、または対物レンズとしての言葉」)。С.87。  
【★3】 СТИ-1. С.12。  
【★4】 ノルシュテイン「交わらぬはずの視線が交わるとき……」、43頁。  
【★5】 СТИ-74. С.308. (ノルシュテイン『フラワーニヤと私』50-51頁)

## あとがき

本書は、博士論文「個人的なハーモニー ユーリー・ノルシュテイン『話の話』を中心としたアニメーションの原形的な可能性」(東京大学大学院総合研究科超域文化科学専攻表象文化論コース、2015年、主査…田中純、副査…内野儀、浦雅春、清水晶子、キム・ジュニアン)を改稿したものである。

ノルシュテインのことを初めて知ったのは2001年のことだった。大学に入って、ロシア文学をやるうとロシア語を第二外国語で選択して、「ロシアには素晴らしいアニメーションがあります」と、ある日授業で観せられたのが『話の話』だった。あのときの衝撃は今でも覚えている。それまであまりアニメーションを観てきていなかったこともあるが、「アニメーション」という言葉が想像させるものからはかけ離れていた。現実でも体験したことがないと思えるくらいのリアルな世界だった。牛に恐怖感を覚え、幽霊のように立ち尽くす兵士やその恋人たちの姿に唾然とした。とにかくまったく理解ができなかった。あまりにわからなくて、熱を出して寝込んだくらいだ。翌日にはブランクのVHSテープを持って、先生にダビングを願って、擦り切れるくらいに繰り返し観た。この衝撃をなんとか咀嚼し、理解したいと思い、アニメーション研究を志すことにした。この作品が自分にとってどういう意味を持つのかきちんと決着を付けなければ死

ねないと（今にして思えば相当大きなことを）考えて、大学院に行った。今ではアニメーションを扱うことを生業とするようになった。『話の話』との出会いによって、文字通りに人生が変わってしまった。

それ以来ずいぶん長いことかかってしまったが、本書によって『話の話』が自分にとって一体何だったのか、そのひとつの答えを出すことができた。いろいろと幸運だったと思う。僕がこの世界に関わりはじめた2000年代は、山村浩二さんがシーンを引っ張って、日本で短編アニメーションをめぐる状況が盛り上がっていた時期だった。DVDや動画サイトが普及して、多くの作品が手軽に見られるようになった。美大でアニメーション教育が本格的に始まって、たくさんの若い個人作家たちが生まれ、彼ら・彼女らと国内外で併走してきた。アニメーションの映画祭コミュニティの先達たちに導かれ、いろんなことを教えてもらった。そういった環境なくしては、本書は決して完成しなかっただろう。

2000年代は、ノルシュテインが毎年のように来日してもいた。阿佐ヶ谷での「ユリー・ノルシュテイン大賞」は若手作家の登竜門で、ノルシュテインがそこで毎年のように入選者の若手たちに説教をしていた様子を、僕は客席から見ていた。2005年には10日間のワークショップがあった。作家が対象だったのであくまで見学者としての参加だったが、そこでの経験は今でもしっかりと記憶に刻み込まれている。当時大学院に入ったばかりだった僕は休憩時間に勇気を出して『話の話』についての卒業論文をノルシュテインに渡したことを覚えていて（ロシア系の学科だったのでロシア語で書かないといけなかったのだ。自分としてはプレゼントのつもりだったのだが、次の日、正しくないところが添削されて戻ってきた）。

そんな10日間ワークショップの確か9日目だと思うのだが、ノルシュテインが『話の話』について「この作品には人類の残してきたあらゆる文化が流れ込んでいる」と言っていたことを記憶している。当時の受講

ノートにもメモされてないので、もしかしたら捏造してしまっている可能性もなきはないのだが、確かに言っていたはずだ。ヘタをすると非常に尊大にも受け取られかねない言葉だが、まったくそんな印象は受けず、圧倒されながらも、なんだか納得してしまったことを覚えている。結局、15年間の思索と活動を経て、『話の話』がああときの僕に与えた衝撃とは、「世界には自分とは違う考え方があろう」ということの発見だったのだろうと今では思う。その発見が突破点となって、世界のすべてが流れ込んできたのだろう。それは同時に、圧倒的に孤独になることでもあった。自分自身もまた人とは「違う」のだと知らされることだったからだ。『話の話』は、それ自体がひとつの宇宙を作りながら、別の考え方、生き方、やり方を肌で感じている。孤独になること、自分自身がその「別」になることは、世界のすべてとつながることを許す。そういうことなのだと思った。

本文を読んでもらえればよくわかると思うが、『話の話』の「永遠」と呼ばれるシーンについては、本当にたくさんそのことを考えた。世界との調和、生きていくことの意味はあくまで個人的なものでしかないというところ、それについてよく考えた。でも確かにそうなのだ、「個人的な」アニメーション作品を観ることは、みなそれぞれに生きる孤独な宇宙を無数に覗き見るような感覚を与える。たくさんアニメーションを観て、それについて考えれば考えるほど、アニメーションは想像力が自由に羽ばたくような場ではないのだなと思うようになった。むしろ、アニメーションとは、人間の想像力の貧しさを露呈するのだと考えるようになった。そして、優れたアニメーション作品は、そういった想像力の限界を認識していることもわかっていた。一人でいることしかできないけれども、一人でいることには限界があるのだ、ということを知っている人たちによる、精一杯の振る舞い。

いま現在僕が属するアニメーション映画祭コミュニティは、とても居心地が良い。本書でも取り上げた世界的な作家たちも、誰もが気さくで、偉ぶる人はいない。『話の話』が連れてきてくれたこの場所は、本書が引用したところの「まともな人たちのギャング」が続べる小さくて穏やかなコミュニティだ。その心地よさは、私は私、あなたはあなたという認識を根底に抱いているから生まれるものなのだと思う。それぞれにはそれぞれの領分があるということを知っている。しかし、それを知っているからこそ、他人に対する（過剰なまでの）信頼がある。すると、それに応えねばという気持ちが生まれる。個人作家のアニメーションやアニメーション映画祭を持つこの刹那なハーモニーの感覚については、これまであまり言葉が費やされてこなかった。何かを記さなければ、それらはきつと、当事者たちだけに伝えられ、彼らが消えれば見えなくなってしまう。そんな素晴らしい調和について、本書に記すことができたのは幸運だったし、それこそがおそらく、作品は作らないがそれについて言葉を費やすことのできる自分にとっての使命だったようにも思う。

『話の話』について考えていると、どうしても、自分自身の生について、自分自身の孤独な宇宙について考えさせられる。自分の小さな頃の記憶を思い出す。雨の日に、濡れた木製の窓枠にもたれかかり、青いビーズ玉を転がして物思いにふけていたこと。覚えてるのは濡れた窓枠から匂い立つ木の香り。そして、透明ななかにインクが差されたような青い模様のビーズ玉。ガラスの硬さとそれよりは柔らかい木。あの情景はおそらく、僕にとっての「世界との調和」だったのだろう。それは、とてもひとりぼっちで、しかしすべてに包まれたかのような、心地よい空間だった。個人作家によるアニメーションとは、そういう空間なのだと思う。ひとりひとりが自分のなかにしまいこんでいる小さな宇宙。自分と世界とが浸透し調和したときの記憶。アニメーションとは、誰かが抱いたそういう時空間を見ることなのだと思う。他人の調和は違和感をもたらず。でも、それを否定することは、結局、自分自身をも否定することになるはずなのだ。孤独への恐れ、消えてしまうことへの恐れは、裏返しのようにデイズニーを始めとしたある種のアニメーションとして、自分が宇宙と一体化しつづけること、みなが永遠に一緒にいることへの願いを析出させているようにも思えた。でも、留まるべきときは留まるのだし、行くべきときは行く、そのこと自体が実際には永遠なのだ。人々がそのように生きてきたのだから、自分たちもまた、そのようにしなければならぬ。

個人的なハーモニーは様々なところに生まれうる。街角に、喫茶店に、ベッドルームに、夜明け前の公園に。その空間は今でもそこに生まれうること、そのことを忘れないでいることを、本書は書こうとしていたように思える。だから、この本は、アニメーションの話をしているし、同時にそうではない。ひとつの生を、物語を、意味を編み上げるとはどういうことなのかを語るものなのだ。たぶん、いくらかの人たちは、ノルシュテイン作品や『話の話』そのものを精密に解読することを期待していたかもしれないが、申し訳ないことに、これはそういう本にはならなかった。たぶん、作品自体に、あまり寄り添うことはできていない。もちろん調査は重ねたが、この謎めいた作品を通じて発現した原形質性を頼りに、僕が「幻視」した結果のものだと思う。でも、『話の話』の謎を追うなかで見えてきたものは、すべて入っている。これは僕が2001年に『話の話』を初めて観て以来考えてきたこと的全記録である。本書で書かれたものはすべて、アニメーション作品やそれを作った作家、そのまわりにいる人々たちから学んで受け取ったものの結果であり、自分自身の過去や記憶、そして他人の過去や未来さえも、自分自身と再び溶けあっていた。本書は僕なりの「個人的なハーモニー」である。『話の話』が要求するのは、そういうものを作り出せ、ということだと

僕は受け止めた。自分自身の生に対して、自分なりに、ひとつの意味・物語を見いだすこと。そしてそれは、とても穏やかに、世界を、宇宙を、永遠を想像し、自分を溶け込ませてゆくこともある。もちろんそれらの全体は僕自身の個人的なものであって、あなたのものではない。でも、その個人的な宇宙は、他の宇宙の存在を忘れないだろうし、忘れられることもきっとないはずなのだ。

ここに辿り着くまでには、数え切れないほどの方々に背中を押してもらいました。限られた紙面にその無数の名前を記すことはできないけれども、二名の指導教官、浦雅春先生と田中純先生に御礼申し上げます。また、この成果を世に出すためにご尽力いただいた、フィルムアート社の藪崎今日子さん、そしてデザイナーの戸塚泰雄さんに心より感謝いたします。

そして亡き母にこの本を捧げます。ここではないどこかについて想像すること、一人の世界を生きること、そして新しい場所を作ることへの夢想、この本に書かれているすべてのことはそこから始まり、いまここで、ひとつの答えを出せたような気がしています。

2016年11月24日

土居伸彰